

聖德太子像 解説 京都 仁和寺 藏

聖德太子を尊崇することは特に鎌倉時代に入るに及んで隆盛を極めた。それは獨り倭國佛教最初の教主として佛教各宗に互つて信仰せられたのみならず、更に廣く一般民心にまで浸透したものであつた。末法の世に入つたといふ絶望的な意識を以て天災地殃と門諍堅固の世相を眺めるものには、眼前に見ることを許されぬ救世主の出世こそ、却て熱烈な至願となり、憧憬となつたものであらう。佛徒の間に熱烈な釋尊思慕の念の起つたこともこの諦觀から生れたものであり、又一方緇素一般に互つて倭國の教主聖德太子を尊崇することによつて纔かにその憧憬の念を癒し、太子の鴻業に對して歸敬の念を篤うしたことは、當代に於ける太子傳研究の勃興、御影尊崇の流行、更には太子未來記の流行などによつて瞭々察知せらるゝであらう。かくの如き時代的背景によつて太子像とし云へば、二歲南無佛像、十六歲孝養像、三十五歲勝鬘經講讀像がその殆んど大部分を占むることは人皆のよく知る所である。仁和寺太子像はその所謂十六歲孝養像として最も代表的なものと云へやう。髪も美豆羅に結び、袍の上に袈裟を掛け、柄香爐を把る御姿を通例とする。播磨一乘寺に此種の太子像の古圖と認められるものが、天台高僧像と一具を成して傳へられてゐるが、之は坐像であり、且兩頬に放髪を垂れ、數個の侍童を配するなど、所謂孝養像とは相當圖樣を異にしてゐる。その上部に押された色紙形の贊文が天慶九年橘在列撰叡山東塔法華三昧堂壁畫諸大師等贊に同じい所から推して、この像樣も略藤原時代の樣式を傳へるものと想像されるが、之を外にして仁和寺式太子像には鎌倉時代以前の制作と認め得べきものは今傳らず、或は鎌倉時代に入りて前述の如き時代思潮によつて太子尊崇の盛となるに及んで圖樣もかく固定されるに至つたのではないかと考へられる。この像容を十六歲孝養像とすることの典據は聖德太子傳曆の用明天皇二年太子御年十六歳の條に天皇不念の時太子日夜病

床に侍して衣帶を解かず、香爐を擎げて祈請せられたといふ記載に従ふものであるが、特にこの十六歲像なるものが太子像の主要形式の一として選ばれたるに至つたのは、同じく傳曆のこの條に太子が初めて三寶興隆の志を立て給ひ、守屋討伐の事件のあつたことが、佛教徒にとり記念的な出來事であつたといふことが重大なる機縁をなしてゐるのではあるまいか。この像容が果して十六歳の御時に當るか否かに關しては既に古今目録抄の著者も疑を抱いてゐるが、それは措き、この所謂十六歲孝養像が會式の本尊としては必ずしも適當ではないと考へられるにも拘らず聖靈會の本尊として用ひられて來たといふことは、やはり前述の如き意味でこの像容が佛徒の間に重要視されてゐたのによるものと云へよう。繪畫に彫刻にこの樣式による作品は甚だ多いが、就中村山長學氏藏、三重縣四天王寺所藏のものは最も仁和寺像に酷似し、背景其他にかなりの相違はあれ、像容としては殆んど同一原本から出ること信ぜしむるものである。本像は盛上げを混へた金泥の豊富な使用、織文の緻密な彩色、裾廻などに特に顯著に現はれた宋様の轉化と見られる繁褥な褶曲と、之をくゝる打込の強い描線等の特徴より考へて鎌倉期の半ば或は稍降る頃の製作と鑑すべきであらう。